科学者委員会　学術体制分科会
論文査読の意義及び課題に関する検討小委員会　第５回　議事要旨

開催日時：2023 年 4 月 28 日（金）18:00-19:30
開催場所：オンライン会議
出席者：佐々木 裕之、小林 傳司、松井 三枝、和田 肇、山本 晴子、大場 みち子、中村 征樹、田中 智之、堀 利栄（敬称略）
欠席者：小長谷 有紀（敬称略）
参考人：林 和弘（科学技術・学術政策研究所）

１）前回議事要旨の確認と確定

２）有識者からの話題提供及び意見交換
資料２に基づき、参考人　林 和弘（文部科学省・科学技術・学術政策研究所）から、1. 英文誌事業運営の経験観点からみた査読、2. 学術情報流通変革からみた査読、3. オープンサイエンスの潮流を踏まえた査読、について説明を受けた。意見交換の概要は次のとおり。

・ 査読がオープン化すると、興味を持った人が誰でも査読可能になるか？
→原理的にはそうだが、「誰でもできると誰もしない」という問題が指摘されている。クオリティコントロールのための 10 数名以上のクラスターを作り、例えば環境系であれば、市民団体や官庁関係者も入ってレビューするといったマネジメントになるのではないか。もはや編集者と呼ばないが「研究成果公開メディアのデザイナー」の大事なスキルになる。F1000Research の査読者プールも一定のフィルタリング（学位、研究歴３年以上、COI なしなど）は掛かっている。

・ レジスタードレポートでは、研究計画段階で事前登録することになるが、誰がこのシステムを準備するのか？
→研究助成団体が準備することが多い。１次査読と２次査読者のプールは同じと思われる。１次査読を通れば結果は出せるという点がこのシステムのポイント。
→臨床介入試験の領域で類似したシステムが動いている。

・ ウェルカムオープンリサーチ（WOR）の「査読のアウトソース」とはどういうことか？
→F1000Research のサービスを使っている。ここの査読者プールの１、２名で査読するが、オープンアクセスジャーナルのように科学的妥当性を評価して、早く出す方針。

・　研究を公開するプロセスが遷移過程に入っているという指摘だが、人文社会科学系もこの動きに乗るだろうか？また、個人ではなくエンタープライズとしての業績という考え方になっていくのだろうか？

→オープンサイエンスは色々なベクトルがあるが、特に社会解決型の研究はチーム化すると思う。それを学術とか知識体系としてみた場合にどうなるか、まだ誰も決定打となるメディアやプラットフォームを開発していない状態。一方、一人で突き詰めるタイプの研究はそのまま残り続けると思う。

・　あれかこれか、ではなく、あれもこれも、というふうにいろんなパターンが重層化するようになると理解した。

→多次元化、ベクトル化すると思う。今までの査読だけでは対応できなくなる。これまで実用性は高いが新規性がないという理由で却下されることがあったが、評価をどのベクトルで、どのクラスターで行うかというデザインが大事になってくると思う。

・　査読倫理はオープンサイエンスで変わるのか？

→査読者倫理教育は変わらないと思う。逆に、市民が ChatGPT を使いながら査読するといったことに対しては、これから考えなければならない課題。元々ある倫理の考え方の援用から始まると思うが、そのあたりは今後研究していってほしい。

３）今後の進め方

・　アンケート準備の進捗状況：調査研究については阪大で承認され、調査が実施できる状況になった。会員、連携会員にメールで連絡してウェブ上で回答してもらう予定。
・　５月にアンケート調査を行い、６月からは国の審議依頼に対する回答を作成していく。
・　参考資料について：３月 24 日付で研究不正に関する文科省通知が出ている。これまでの研究不正に加えて「査読における不適切な行為」についての記載がある。

４）その他

・　第６回（５月 19 日(金) 18 時～）で、海外の有識者１名からの話題提供と回答作成に向けた議論の予定。

資料：資料１　第4回議事要旨案
　　資料２　「オープンサイエンス潮流を踏まえた査読の意義と展望」　（林先生）
参考資料「研究活動における不適切な行為の防止及び調査体制等について（通知）」

以上